

「帝都」メヒコにおける食料調達の問題

— 貢納表の分析研究 —

小 林 致 広

【要約】 農業生産力増大・社会的余剰生産を中心概念とした文化生態学派の新大陸都市文明発達に関する説明モデルは、ともすれば余剰生産物の集荷・分配という流通過程を等閑視するものであった。非農業的生産者の集積する核である都市の存立基盤として、人口扶養力としての食料資源の確保・調達が大きな意味を有していたことは容易に推測できよう。本稿で扱うメヒコは、アステカ「帝国」の都であり、民族史的資料によって先スペイン期の都市の様相が一定程度復原しうる、おそらくは唯一の都市である。この都市への食料資源調達は、エスタンシア、貢納、市場、の三システムによってまかなわれていたといわれる。貢納システムに関する基本史料である貢納表にみられる食料資源の貢納量、貢納範囲の推定を試みる。それを手掛りとして、メヒコの都市人口規模、メヒコ盆地の余剰生産力に関する仮説を検討することにより、三システム相互の関連を解明する。

史 林 六二巻四号 一九七九年七月

一 はじめに

一九四〇年代以降、アメリカの文化生態学派によって強力に推進された一連の研究の枠組のひとつに、次のような図式がある。複合社会の発展は、その社会の経済体系、とりわけ「生存のための経済活動」の諸側面を考察することによって説明できるというものである。それゆえ、メソ・アメリカにおける都市的文明の発展は、農業生産性の発達による必然的結果として、説明されてきた。たしかに、支配者、官僚、そして種々の工芸職人、商人といった食料生産活動に携わらな

い人々を扶養しうる食料資源の余剰・備蓄が保証されなければ、都市の存立は不可能である。しかし、食料資源の調達を保証するシステムは、単一ではないことを無視してはならない。W・サンダースに代表される文化生態学派の都市文明発達論は、この点において致命的な誤ちを犯している。そして、生態系における一セクターでしかない水利に関するシステムが、あたかも、メソ・アメリカにおける都市的文明発達の方向を支配したかのような結論を導びき出している。^①

本稿は、アステカ「帝国」の首都メヒコ^②を事例として、都市への食料調達システムを説明することを目的としている。

それは、この都市が、メソ・アメリカの諸都市の中で、その発生からの過程を種々の資料であとづけることができる唯一の都市であることが、ひとつの理由である。二世紀にも満たぬ短期間に、水草の繁茂する一介の小島から、征服者たちを驚嘆させた程の大都市へと発達した「帝都」メヒコの発展の原動力は、生態学的適応という説明原理では、十分説明できない。^④そして、その大都市を存立せしめた諸々の機構、とりわけ都市人口扶養力としての食料資源の調達システムを説明することによって、従来の文化生態学派の因果論的説明モデルが無視した諸側面に、光を投じてみたい。すなわち、農業的生産力だけでなく、生産物の分配、交換といった流通過程をも、視野のなかに入れて議論をしなければならぬ。

本稿では、まず、貢納表という資料を手掛りにして、貢納システムによって「帝都」メヒコに、集荷された食料資源が、持った意味を解明していきたい。それは、近年、「貢納制生産様式」を基盤にしていたと指摘されつつある、アステカ社会において、貢納システムが占めていた意義を評価することにも、結びつくことになる。

① 一九五五年に、J・スチュワード、K・ウィットフォードを中心
に「灌漑文明」シンポジウムが開催された。以後、サンダース、ブラ
イス、バレルム、アルミリアス等によってメソ・アメリカを場とした
研究が析出した。Steward, J. (ed.), *Irrigation Civilizations: A
comparative Study*, Washington, 1955. Sanders, W. T. & Barbara
J. Price, *Mesoamerica: The Evolution of a Civilization*, New York,
1968. Palerm, A. y E. Wolf, *Agricultura y civilización en Meso-*

américa, México, 1972. 最新の動向・成果は、Wolf, Eric, R. (ed.)
The Valley of Mexico. Studies in Pre-Hispanic Ecology and Society,
Santa Fe, 1976 参照。

② メヒコは、テノチティトランとトラテロルコを合せたものを指す。

③ 英語版については、Lombardo de Ruiz, Sonia, *Desarrollo urbano
de México-Tenochtitlan según las fuentes históricas*, México, 1973.
参照。

④ 灌漑文明シンポジウムでJ・スチュワードは、交易、征服活動などの側面も強調したが、この点は見落されてきた。都市起源の説明モデルについては「Carter, H., "Urban Origins: a review", *Progress in Human Geography*, vol. 1 (1977), pp. 12-32. 参照。

⑤ Bartra, R., *Marrismo y sociedades antiguas*, Mexico, 1975. この論文集のうち最終章は、原田金一郎・青木芳夫訳「アステカ社会における貢納と土地占取」『歴史評論』三四三号（一九七八年）八四—一〇一頁として訳されている。

二 貢納表の資料的性格

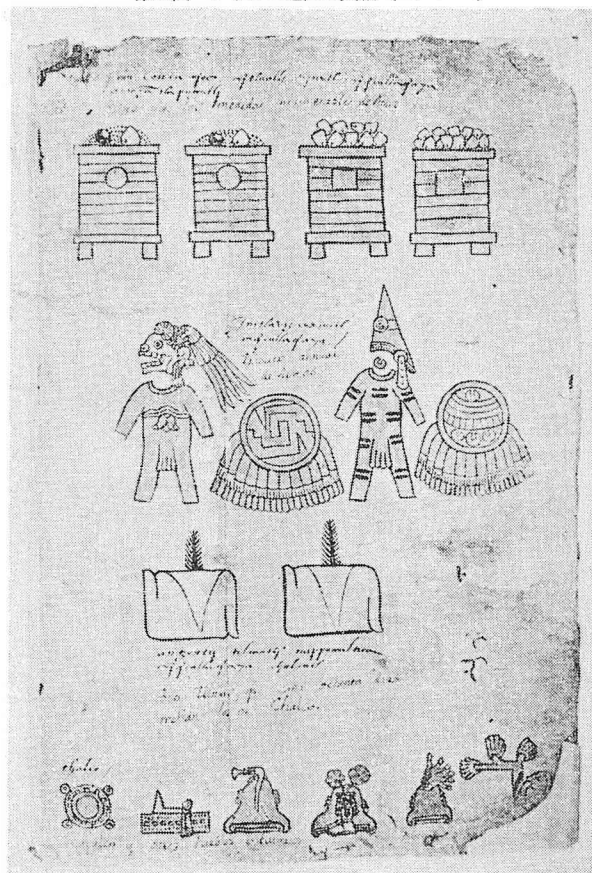
コルテスが、その第二書簡で、各地方が納める貢納品目とその量についての規定が記されていた絵文字と数符で書かれた文書について言及していることは、よく指摘されてきた。^①この文書が、われわれが貢納表とよぶ資料と同一のものであるか否かは、はっきりと確定することはできない。貢納表は、次にのべる三種の貢納記録の相互比較によって推定・復原しうる仮説的な貢納記録の原型ともいえるべきものであり、現存する資料そのものではない。

（一）三種類の貢納記録

三種類の貢納記録とは、*Matrícula de Tributos* (以下MTと略)、*Código Mendocino*. 2ª parte (以下CMと略)、および「モクテスマにインディオ達が納めていた貢納についての情報」(以下『情報』と略)を指す。このうち、前二者は絵文書であるが、最後のものには、絵文書についての言及はみられるが、絵文書は添付されていない。

MTは、一六枚の土着の紙(アマトル)の両面に、多色で、貢納地区毎の貢納品目と地区内の町とが描かれている。その作成年代は明らかではないが、その綴じ方が、ヨーロッパ方式であることから、征服後であることは確実である。第8、10の二頁を除けば、一頁が、一貢納地区となっている。各頁の最底辺に町の絵符が左から右へ、さらに必要ならば、右辺を上に向けて配列されている。これらの町の絵符の上部に、貢納品目が描かれている。一般に、最下部に衣類、最上部に食料品が描かれている。これらの絵符類のいくつかには、スペイン語およびナワトル語による注釈が付けられている。

第1図 チャルコ地区の貢納 (M. T. 11^r)



最上列は、木製穀物容器
第2列は、軍服および桶
第3列は、木綿製マント
最下列は、チャコル地区のプエブロ

MTの原本は、メキシコ市の国立人類学博物館に保管されているが、最初の二葉は著しく破損している。^② 部分については、一七七〇年に、ロレンサナ Francisco A. de Lorenzana が出版したコルテスの書簡集に付された図版によって、一部復原することができる。^③ MTでは、三四の地区について知ることができる。

CMIIは、誤まって第一部に編集された17、18を除いて、三八葉からなる。^④ この絵文書は、一五四一—四二年頃に、副王メンドサ Antonio de Mendoza の指示によって作成された。現在は、オックスフォード大学のボードリイ図書館に

保管されている。この絵

文書には、三九の地区が含まれている。各地区毎の記載内容は、MTとほぼ同一であるが、絵符の配列が大きく異なっている。すなわち、各頁の左辺に町の絵符が並べられ、その右側に貢納品目が記載されている。その配列も、上部に衣類、下部に食料品が描かれており、MTとまったく逆となっている。これは、ヨーロッパ

ッパの表現様式に従って絵文書が作成されたためである。^⑤ C M IIには、各絵符にスペイン語の注釈が付されるだけでなく、各地区毎の概要を記した解説が、各葉の裏頁に記載されている。

第三番目の資料『情報』は、一五五四年にベラスコとケサーダが作成した、征服前の貢納についての資料である。^⑥ これは、ある絵図を示しながら、六名の古老インディオから、モクテスマ時代の貢納について聴取した記録である。六名の情報とはいえ、内容は二つの系列からなっている。この二系列相互では、貢納品目とその量などに若干の差異がみられるが、貢納地区割においては、地区名および地区数も、まったく同じである。『情報』では、各地区内の町の名が一部しか言及されておらず、単に主邑名と構成町数のみが記載されている例がほとんどである。この『情報』では、各貢納品の征服時における交換価値についての記載もみられる。

以上、三種の貢納記録における貢納地区についての記載を整理したものが、第一表である。M TおよびC M IIにおける貢納地区名は、各地区の最初にある町の絵符が示す名で代表させた。従来のすべての研究においても、この最初の町は、貢納地区の中心、すなわち主邑と考えられてきたからである。貢納地区数は、C M IIの三九が最大である。M Tは、C M IIにあるアシヨロパン (folio 27^r)、アトニルロ・デ・ペドラサ (folio 28^r)、トラチキアウコ (folio 45^v)、トチテベック (folio 46^v) およびオシティバン (folio 55^r) の五貢納地区を欠いている。一方『情報』では、シトラルテベック (folio 17^v-18^v)、トラテロルコ (folio 19^r)、マリナルコ (folio 35^r)、ショコティラン (folio 35^v) の四地区が欠落しているが、アバンというC M IIにも記載のない貢納地区の記載がみられる。また『情報』では、C M IIの^⑦に記載されている三地区、トラコサウティラン、クイアウテオパン、ヨアルテベックの名が見当らず、代りに、サカトラン、テキスクイトラン、イチカアトヤッケの名が記載されている。これは『情報』のインフォーマントたちが、示された絵図を誤読したため生じたミスであった。^⑦

C M IIの貢納地区の割り振り順を基準として、残り二者における欠落地区を検討すると次のことがわかる。すなわち欠

第1表 3種の貢納記録

MT		C M II		『情 報』			
町数	folio	地 区 主 邑 名	町数	folio	地 区 主 邑 名	町数	順序
11	1 ^{r.v}	Citlaltepec	11	17 ^v 18 ^r	欠	欠	欠
1	2 ^r	Tlatelolco	1	19 ^r	欠	欠	欠
23	2 ^v	Petlalcaco	23	20 ^{r.v}	Petlalcaco	43 44	1
25	3 ^r	Acolhuacan	26	21 ^v 22 ^r	Aculma	36	2
16	3 ^v	Quauhnhuac	16	23 ^{r.v}	Cuernavaca	25	3
26	4 ^r	Huaxtepec	26	24 ^v 25 ^r	Guastepeque	28	4
7	4 ^v	Quauhtitlan	7	26 ^r	Cuautitlan	15	5
欠	欠	Axocopan	10	27 ^r	Axacuba	10	6
欠	欠	Atotonilco P.	7	28 ^r	Atotonilco	7	7
9	5 ^r	Hueypuchtla	9	29 ^r	Teopochitlan	10 8	8
6	5 ^v	Atotonilco G.	6	30 ^r	Atotonilco	7	9
7	6 ^r	Xilotepec	7	31 ^r	Xilotepeque	6	10
13	6 ^v	Quahuacan	13	32 ^r	Quahuacan	15	11
12	7 ^r	Toluca	12	33 ^r	Toluca	16 9	12
6	7 ^v	Ocuilan	6	34 ^r	Oquila	6	13
2	8 ^r	Malinalco	2	35 ^r	欠	欠	欠
1	8 ^v	Xocotitlan	1	35 ^r	欠	欠	欠
10	8 ^v	Tlachco	10	36 ^r	Tlachco	10	14 15
欠	欠	欠	欠	欠	Apan	5	15 14
14	9 ^r	Tepequacuico	14	37 ^r	Tepequacuico	14	16
12	9 ^v	Cihuahatlan	12	38 ^r	Çihuahatlan	13	17
14	10 ^r	Tlapa	14	39 ^r	Tlapa	16 15	18
8	10 ^v	Tlacozahtitlan	8	40 ^r	Çacatlan	8	19
6	10 ^v	Quiauhlteopan	6	40 ^r	Tequisquitlan	6	20
6	10 ^v	Yoahtepec	6	40 ^r	Ichcaatoyaque	6	21
6	11 ^r	Chalco	6	41 ^r	Chalco	8	22
22	11 ^v	Tepeacac	22	42 ^r	Tepeaca	22	23
11	12 ^r	Coayxtlahuacan	11	43 ^r	Cuestlavaca	11	24
11	12 ^v	Coyolapan	11	44 ^r	Cuilapan	11	25
欠	欠	Tlachquiauco	3	45 ^r	Tlaxiaco	3	26
欠	欠	Tochtepec	22	46 ^r	Tochtepeque	22	27
8	13 ^r	Xoconochco	8	47 ^r	Soconusco	6	28
7	13 ^v	Quauhtochco	7	48 ^r	Quautuchco	7	29
6	14 ^r	Cuetlaxtlan	6	49 ^r	Cotlastla	7	30
7	14 ^v	Tlapacoyan	7	50 ^r	Tlapacoya	7	31
11	15 ^r	Tlatlauquitepec	11	51 ^r	Tlatlauquitepeque	11	32
7	15 ^v	Tochpan	7	52 ^r	Tochpan	7	33
2	16 ^r	Atlan	2	53 ^r	Atlan	2	34
5	16 ^v	Ctzicoac	5	54 ^r	Çicoaque	5	35
欠	欠	Oxitipan	1	55 ^r	Oxitipan	1	36

落地区は、C M IIにおいて連続して記載されている地区の組み合わせである。それゆえ、後二者の欠落地区に相当する部分は、何らかの理由で散佚したフォリオに記載されていたと考えうる。同様にC M IIになく『情報』に記載のあるアパン地区も、本来の貢納表においては、記載されていたと考えたい。すなわち、三種の貢納記録は、いずれも完全な資料ではなく、征服前に存在していた貢納表の一部ではない。貢納表において、貢納地区数がいくつであったか知る材料はないが、最低四〇地区はあったといえる。上限については、新しい資料の発見がないかぎり確定しえない。

（二）貢納表の資料としての性格

「……平和的關係にある町には、定められた貢納が賦課されるわけではない。貢納する側の裁量によって、年に何度か貢納していた。……これらの場合、統治官や収税吏は派遣されず、その町の領主が統治権を保持していた。一方、戦争によって、（メシカ族が）手に入れた町々は、*tequitin tlaocotl*。すなわち奴隸として貢納していた。これらの町には、統治官、財務官、収税吏が配備されていた。町の領主は町の住民を支配はするが、彼自身はメヒコの（大）領主の支配下におかれていた。」^③

これは、タピア Andrés de Tapia とらう一征服者の証言である。C M IIの町の絵符の注釈に“Calpixque, Pueblo”と記してあることから、貢納表に記載されている町は、カルピスキ *calpixqui*（収税吏）の配備された町と定義することができよう。それゆえ、貢納表に記載されている町を、貢納をしていた町とする旧来の考えは、そのまま受け入れることはできない。

また、軍事力による征服活動と、カルピスキ配備という貢納体制への編入との間に、必ずしも直線的な関係がみられなかったことも見のがしてはならない。C Mの第一部は、メシカ族の歴代大領主が征服した町のリストであるが、C M IIにおいても記載されている町は、そのうちの約三割である。また、トトナカ地方のクエトラストランのように、一度、征

服され、カルピスキのみならず統治者まで配備された町が、反乱を起して再征服されたという例もある。^⑨一方、C M IIに記載されている町のなかにも、征服された事実とその年代が確かめることのできないものがある。とくに、貢納地区の主邑でありながら、どの年代記においても言及されていないものとして、ワステカ地方のアトラン、オシティパンという二つの貢納地区主邑がある。

以上のような制約はあるが、貢納表は、一五一一年以降の状態についての記録とみなすことができる。^⑩一五一一年は、ミステカ高地のトラチクィアウコが征服されたという年である。C M IIに記載されている町の中には、一五一一年以降に征服されたものもありうる。しかし、その征服年を知りえるものは、今のところない。^⑪一般に一五一〇年代においては、顕著な征服前線の拡大がみられなかったといわれていることから、一応、次のようにいうことができよう。貢納表は、スペイン人到来時あるいは直前の貢納体制を示す記録である。

しかし、この貢納表が、「アステカ帝国」の貢納体制全体の記録でないことは、前述したタピアの証言からも知りうる。『情報』には、M TとC M IIにみられない貢納や貢納体制についての記録もある。種々の貢納に関する記録の比較によって、貢納表が体現している貢納体制に含まれていないものを知ることができる。今、労働力徴発という形態の貢納を除いて、^⑫現物形態による貢納に限ってみても、次のような数種の貢納および貢納体制について、貢納表は情報を有していないことが指摘できよう。

政治的従属関係にともなう「帝国」の正規の貢納のうち、次のものは貢納表に記載されていない。

a₁……友好的関係にある町、すなわち、タピアの証言で、前者のカテゴリに属す町々からの貢納。^⑬

a₂……「帝都」メヒコ内部からの貢納。これには、「帝都」内の市場などから徴発される市場税的な貢納を含める。

a₃……王宮の生計維持のため、「帝都」近郊の町々から毎日上納される貢納品。いわゆる *servicio cotidiano* とよばれるもので、生鮮食料、燃料、日用品などが主たる貢納品である。^⑭

また、正規の貢納体制以外にも、それを補助し並存する形で存在した貢納も、F・ベルダンの研究によって明らかになりつつある。^⑤ このカテゴリーには、次の二種が含まれる。

b₁……年祭において納められる貢納。『情報』においては、四回ないしは五回の年祭、コディセ・チマルポボカでは、六回の年祭の名前と、各年祭に納められた貢納品が記載されている。^⑥

b₂……種々の国家的行事あるいは事業において徴発される貢納。新しい神殿の建設・落成、大領主の葬儀と即位式などとともに、軍事活動も含めうる。^⑦

これらの貢納のうち、a₁、b₁においては、食料資源は貢納品目とされてはいなかった。a₁、b₁においては、装飾のほどこされた高価なマントなどの、いわゆる奢侈財が徴発されていた。a₂、a₃、b₂においては、食料資源も徴発の対象となっていたが、その量的配分について言及した資料はえられない。ともかく、貢納表は、被征服地から貢納システムによってメヒコに集荷された食料資源の大部分を記載した記録と考えるであらう。

- ① Cortés, Hernán, *Cartas de Relación*, México, 1973, pp. 66-67.
Díaz del Castillo, *Historia Verdadera de la Conquista de Nueva España*, México, 1974, p. 378. López de Gómara, F., *Conquista de México*, Biblioteca de Autores Españoles, t. 22, Madrid, 1946, p. 346.
- ② 本誌では、Corona Nuñez, J. (ed.), *Matrícula de Tributos*, México, 1969 を利用。
- ③ Lorenzana, Francisco A., *Historia de Nueva España escrita por su esclavido Conquistador Hernán Cortés... Aumentada*, México, 1770. 以下は最初の二葉の一部の原型が描かれてゐる。
- ④ 本誌では、Lord Kingsborough, *Antiquidades de México*, vol. 1, México, 1964 所収を利用。
- ⑤ Robertson, D., *Mexican Manuscript Painting of the Early Colonial Period*, New Haven, 1959, pp. 72-77.
- ⑥ Scholes, Frances V., y Adams, Eleanor B., (ed.), *Información sobre los tributos que los indios pagaban a Moctezuma*, México, 1957.
- ⑦ Berdan, F. F., "A Comparative Analysis of Aztec Tribute Documents", *Actas de XLI Congreso Internacional de Americanistas* (México, 1974), México, 1976, vol. 2, pp. 131-42.
- ⑧ Tapia, Andrés de, "Relación sobre la conquista de México", *Colección de Documentos para la Historia de México* (C. D. H. M. 2-87), México, 1971, t. 2, pp. 561-62.
- ⑨ 拙稿、「「メソティカ帝国」の成立過程——土著史料による試み——」『史

林』五八巻二号(一九七五年)、一三七—七八頁。

⑩ 前掲論文、一六四頁。

⑪ トラトラウツァ・テパツクが一五一五年に征服されたとチャールバインは記す。しかし、この主臣は、既にモテクスマ一世の征服リストに言及されている。再征服がチャールバインの誤りか不明である。Chimalpahin Cuauhtlehuanitzin, F. S. A. M., *Relaciones originales de Chalco Amquehemecan*, México, 1965, p. 233.

⑫ O.M. folio 17^v-18^r は「メクスカス」の軍事要塞への兵員徴発の対象となる「メクスカス」の軍事要塞への兵員徴発。Zantwijk, R. A. M. van, "La organización de once guariciones aztecas: una nueva interpretación de los folios 17^v-18^r del Códice Mendocino", *Journal de la Société des Américanistes*, (Paris), t. LVI (1967), pp. 149-60.

⑬ この典型としてのマカトランの例が、一五八〇年の地誌的報告書に詳しく述べられている。Paso y Troncoso, F., *Papeles de Nueva España*, Madrid, 1906, t. 5, pp. 59-60.

⑭ メキシコ王宮の食料の大部分は「tlanquitziaqualili」(市場からの食

三 食料資源の貢納

一六世紀初頭のメソ・アメリカの土着民の栄養摂取体系を、具体的に示す資料を得ることはできない。征服者たちによって記述された、「帝都」内の大市場(トラテロルコ)で売買されていた食料品目を示したのが第二表である。しかし、これらの品目が、どのような組合せで、摂取されていたかは不明である。また、サアグンたちがリスト・アップしているモテクスマ二世の正餐に出された数十皿に及ぶ豪華な食事と、無名征服者が「世界中でおそらくはもっともつつましい」と形容した平民の食事とを、同一に論じることができない。

料であり、トラテロルコの大市場から徴発されていた。Anderson, A. J. O. & Charles E. Dibble, (ed.), *Florentine Codex: General History of Things of New Spain*, book 8, Santa Fe, 1954, p. 37. 一方、メクスコの王宮に「インディアン・ショナトルが記録を残している」。Mollins Fabrega, N., "El Códice Mendocino y la Economía de Tenochtitlan", *Revista Mexicana de Estudios Antropológicos*, vol. 14 (1954/55), pp. 303-35.

⑮ Berdan, F. F., "La organización del tributo en el imperio Azteca", *Estudios de Cultura Nahuatl*, vol. 12 (1976), pp. 155-96.

⑯ Sholes y Adams, *op. cit.*, Velásquez, F. F., (tr.), *Códice Chimalpopoca: Anales de Cuauhtlan y leyenda de los soles*, México, 1975, p. 64.

⑰ 「トラテロルコは軍事活動にやむなく、食料、武器などを徴発されている」。Durán, Fr. Diego, *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*, México, 1969, vol. 2, pp. 358, 420. Anderson & Dibble, *op. cit.*, p. 69.

第2表 市場で取引された食品類

I 穀物類 トウモロコシ インゲン豆 チア ウアウトリ ペピータ (カボチャの種実)	VI 水産物 魚(生、塩物、燻製) エビ 貝類 サンショウオ 藻類
II 香辛類 トウガラシ トマト 塩	VII 肉類 七面鳥・卵 野鳥(鳩、鶩、鴨 etc) 去勢犬 鹿(生、燻製) 兎(生、燻製) モグラ・イタチ・鼠 ^{おずみ} ・亀・蛇・イグアナ 肉食獣
III 果物類 バンジロウ バンレイシ パイナップル マメイ サボータ チャヨーテ アグアカーテ 梅・桃類	VIII その他 昆虫・幼虫類 蜜蜂・蜂蜜 マゲイ汁(プルケ) カカオ 石灰
IV 野菜類 トウモロコシ穂 小トマト サボテン キビ類 野草類	IX 調理品 アートル(粥) タマル トルティーリヤ 煮物 カカオ(飲料)
V 根茎類 サツマイモ ヒカマ カボチャ	出典：ドゥラン及びサア グン。ゴチック は、貢納表記載

リー八〇%、インゲン豆一〇%、プルケ酒一四%、植物一四%、動物二%。この配分は、八世紀以前のものとして提出されたモデルと比較して、動物、植物に依存していたカロリー配分(二二%)が大幅に減少していることに特長がある。その分だけ、トウモロコシという基本穀物への依存度が高まっていることになる。すなわち、征服前においては、全カロリーのうち、九〇%が、トウモロコシ、インゲン豆といった穀物類によってまかなわれていたといえる。

以下の論考においては、貢納表にみられる貢納食料資源を、穀物類と非穀物類にわけて論じたい。

(一) 穀物類以外の貢納食料資源

貢納表に記載されている食料品のなかには、いわゆる生鮮食料品は、一際ない。しかし、生鮮食料品が、貢納の対象からまったく除外されていたわけではない。『情報』において、「食料品と労働奉仕」あるいは「こまごまとした物と労働奉仕」

W・サンダースは、征服前の栄養摂取体系について、二つのモデルを提出しているが、^②その資料としては、現在の農村部の農民の食事についての種々の調査報告が利用されていると考えうる。征服直前のモデルにおいては、次のような配分(カロリー)となっている。トウモロコシ・ウアウト

という項で、貢納表に示される貢納体制とは異った貢納、前述した *servicio cotidiano* に属する貢納の記載がある。^③ 確かに、トマト、果物、食事、七面鳥が言及されている。しかし、これらの貢納は、各貢納地区の主邑などに納められたもので、派遣された収税官などの役人官職の食料として利用されたもので、「帝都」まで搬入されたとは考えられない。

また、ドゥランは、貢納として「帝都」に搬入された品目を詳述している。^④ それらのなかには、魚貝類、肉類、果実類は言及されているが、野菜類の記載はみられない。しかし、征服者が描写しているように、大量の生鮮食料品が、「帝都」南郊のチナンパ耕作地帯からカヌーによって、日々、搬入されていたことは、よく知られている。以上のことから、保存のきかない生鮮食料品は、貢納システムというより、市場システムを通して、「帝都」に集荷されていたということができよう。

さて、貢納表に記載されている穀物以外の食料品は、六種類である。そのうち、三種類は、カロリー面についての寄与率は少ないが、土着民の食物複合のなかで、重要な位置を占めていたものである。それらは、トウガラシ（乾燥）、食塩、および石灰である。

トウガラシ *chili* は、C M II によると、ワステカ地方の三貢納地区から、年一度、合計一、六〇〇荷が貢納されていた。トゥチパン地区から八〇〇荷、チョコアック、オシテイパン両地区から四〇〇荷ずつである。ワステカ地方は、現在でも、メキシコ有数のトウガラシ生産地のひとつである。^⑤ これらは、乾燥させたものであった。一方、チナンパ耕作地帯からは、生のトウガラシが、市場システムを通じて「帝都」に集荷されていた。

トウガラシとともに、味気ない食事に刺激を与えていたのが食塩 (*itau*) であった。C M II によると、オクイラン地区から、年二回、二千固りずつの「メヒコの領主たちだけが食した白くて目の細い」食塩が、貢納されていた。この食塩は、おそらく、イスタパンの塩泉 *Ixtapan de la Sal* のものであろう。塩水潮化したテスココ湖を擁すメヒコ盆地では、塩は十分、自給できたであろうことは、征服者の記録やサンタ・クルスの景観図によって窺い知ることができる。^⑥ ただ、潮

産の塩はレンガ色で良質でなかったため、領主たちは、種々の方法で、良質の塩を確保しようとした。^⑦

その手段としては、塩、とくにメキシコ湾岸産の海塩の交易ルート上の市場を掌握する方法と、直接的に岩塩鉱山の領有に向う方法とがみられた。いずれの場合にも、軍事行動をともなつた。前者の例としては、コアイストラワカの征服、後者の例としては、クエチラン塩山をめぐるメスティランの領主との攻防や、イスタパ塩山への防衛軍隊の駐留というものをあげることができよう。^⑧ メンディサイバルが指摘したように、塩の確保という問題は、メキシコにおける土着民の政治的領域区分などにおいて、重要なものであったといえよう。^⑨

石灰 *tenexthi* は、食料品とはいえないが、トウモロコシ粒からトルティリヤを調製する過程に不可欠な材料であった。C M IIによると、アトニルコ・デ・ペドラサ地区から、年二回、四〇〇荷ずつ、テペアカク地区から、八〇日毎に、四千荷が、納められていた。^⑩ 一般に、トウモロコシ1kgを調製するためには、約四〇gの石灰が必要とされている。^⑪ すなわち石灰一荷（約三kg）で二五荷（二・五ファネガ）のトウモロコシをトルティリヤとすることができるとなる。C M IIの示す一年の石灰貢納量は、一八、八〇〇荷であるから、四七万荷（二・三万五千ファネガ（四七・五九トローへ相当）のトウモロコシを調製できる量である。もっとも、これらの石灰が、トウモロコシ調製に使われたという確証はない。建築用の漆喰を作るために利用されていた可能性も大である。

以上の貢納品とは異なり、その利用が限定された社会階層においてのみ認められていた奢侈品として、次の三種類の食料品が貢納されていた。カカオ、蜂蜜、およびマゲイ汁（ブルケ酒）である。

カカオ *cacahuatl* は、メソ・アメリカでは、交易活動における一種の交換貨幣としても利用されていたが、貢納表のカカオは、飲料用のものであったと思われる。^⑫ C M IIによると、メキシコ湾岸のトチテペック地区―二〇〇荷、クアウトチコ地区―二〇荷、クエトラストララン地区―二〇〇荷のカカオが年一度貢納されていた。それに反して、太平洋岸のシウアトラン地区からは、「赤いカカオ」*xochicacahuatl* 八〇荷、ソコノスコ地区からは二〇〇荷が、それぞれ年二回貢納

されていた。これは、おそらくカカオの実の成育条件の差によるものと思われる。¹³⁾

カカオは、即位式、地方領主の歓迎宴や、種々の年祭などのハレの場において、共飲されるのが常であった。また王宮警護の近衛兵や武勲をあげた戦士にも飲用が許されていたという。一方、戦闘直前の兵士や、人身犠牲となる捕虜たちにも、カカオの飲用が許される例もあった。その飲用に際しては、特別の容器 *tecomati* が使われ、次にのべる蜂蜜やバナナなど種々の香料を混ぜあわせていた。¹⁴⁾

蜂蜜 *quahnectli* は、バルサス川流域のトラチコ、テペクァキルコ、トラコサウティトラン、クイアウテオパン、ヨアルテペックの五地区から貢納されていた。C M IIによると、前二者は、八〇日毎に二百つぼずつ、後三者は、年に二回、百つぼずつの蜂蜜を貢納していた。

アステカ社会では、日常生活での飲酒は厳禁されていた。マゲイ *metli* (龍舌蘭の一種) の汁から醸造したブルケ酒 *octli* や、その蒸留酒 *necutli* は、神の飲物 *teo-octli* とされ、一定の宗教儀礼を除けば、貴族たりとも飲用できなかった。¹⁵⁾ マゲイは、中央高原一帯で栽培されていたが、オトミ系の諸族は繊維採取に限って利用していたといわれる。¹⁶⁾ そのため、アシコパン、ウェイプチトラの二地区から、四〇〇つぼのマゲイ汁が、それぞれ年二回、貢納されているだけである。

これら三種の食料品は、極めて限定された消費の場しか有していず、人口扶養力と結びついた生存財のカテゴリに属するものではない。統制された体系によって再分配されたこれらの奢侈財を扱うことは、本稿の直接の目的をはずれる。「帝都」メヒコにおける都市社会の構成の実態、とりわけその成層化について解明することも、そのためには不可欠な作業といえる。以上の問題は他の機会に論じることにして、次に穀物類の貢納についてのべよう。

(二) 穀物貢納—その量—

貢納されていた穀物は、C M II、『情報』によると、トウモロコシ、インゲン豆、チア、ウェアトリの四種であった。

一方、MTでは、木製穀物容器 *cuezcomati* に描かれた穀粒のうちトウモロコシとインゲン豆については言及しているものの、細粒状の点で示された穀物が何であるかは明らかでない。チア *chian*、ウアウトリ *huautli* とも、ケシ粒のような細粒であり、征服前には土着民が食用に供していた事は明らかである。しかし、それらは、あくまで、二主穀（トウモロコシ、インゲン豆）の補助的な穀物でしかなかったといえる。^⑦

これらの穀物を貢納していたのは、アパン地区を含めると二一の貢納地区である。各地区の貢納量の算定は、既に何人かの研究者によってなされてきた。しかし、その方法、結果は同一ではない。それは、三種の貢納記録をどのようにに利用、解説するかによって生じたものである。ベルダンが指摘したように、^⑧ 既応の研究には、三種の貢納記録の相互比較検討を抜きにして、いずれかの記録のみから貢納量を導き出す傾向がみられた。今、貢納量を算出するためのデータとして、次の三種類の異なる質をもった情報を得ることができる。

(イ) … 絵符自体。MTおよびCM II。

(ロ) … 絵符の注釈。MTではナワトル語およびスペイン語。CM IIではスペイン語。

(ハ) … 解説部。CM IIの解説部および『情報』の本文。

従来の諸研究は、(ロ)、(ハ)を依拠にしたものが多く、絵符自体に着目した研究は少なかった。これらの注釈や解説のみに依存することが危険であることは、CMの最終頁に付された編者のコメントからも明白である。彼は「出航十日前に絵符の注釈を土着民に依頼したため不備が多い」ことを認めていた。^⑨ また、『情報』のインフォーマントたちは、すでに土着の絵文書の書式とは疎遠となっており、示された「絵図」の読む順序をまったくスペイン風におこなっている。このような事情を考え、本稿では絵符の検討を基礎に貢納量を算出する方法をとりたい。

まず、MT、CM IIとの穀物容器の絵符についてみよう（第三表参照）。MTでは、二種類の穀物容器の絵符がある。ひとつは、トウモロコシ、インゲン豆の絵符と細粒とが描かれたもの（以下C型と略）で、トウモロコシだけが描かれたもの

貢 納

報』		Clark				Barlow				Molins				Borah & Cook				試 案	
CH	H	M	F	CH	H	M	F	CH	H	M	F	CH	H	M	F	CH	H	A	B
1	1	1	1	1	1	—	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
欠	欠	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	9.0	8
—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	9.0	8
(1)	***	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	3	3	3	3	13.5	12
—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	9.0	8
欠	欠	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
欠	欠	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
—	—	1	—	1	—	1	—	1	—	1	—	1	—	1	1	1	1	4.5	4
—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4.5	4
1	—	6	2	2	2	6	2	2	2	6	2	1	1	6	2	2	2	18	16
1	—	2	2	—	—	2	2	—	—	2	2	—	—	1	1	1	1	4.5	4
—	—	2	1	1	—	2	1	1	—	2	1	1	—	1	1	1	1	4.5	4
—	—	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	4	2	—	—	9 (4.5)	8 (4)
11 (12)	4	28	21	21	18	27	21	21	19	28	21	20	17	34	30	26	26	135 (130.5)	120 (116)
ローへ**		88 トローへ				88 トローへ				86 トローへ				116 トローへ				トロー へ	トロー へ

で満たされた木製穀物容器 4 つ」

が二例のみある。一方、C M IIでは、C 型のものは二例しかない。かわって、トウモロコシ + 細粒の絵符、インゲン豆 + 細粒の絵符とといったものが多くある。トウモロコシだけ、インゲン豆だけという絵符もみられる。これら穀物容器の絵符の種類でなく、その数に注目して、M T と C M II を比較してみ

第3表 穀物

	M T		C						M				Ⅱ				『猜』	
	絵 符		絵 符						注 釈				解 説					
	C 型	M	C 型	M + α	F + α	M	F	M	F	CH	H	M	F	CH	H	M	F	
①Petlascalco	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
②Acolhuacan	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
③Quauhnhuac	1	—	—	1	—	—	1	1	1	1	1			A		1	1	
④Huaxtepec	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		1	1	
⑤Quauhtitlan	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		欠	欠	
⑥Axocopan	欠	欠	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
⑦Atotonilco P.	欠	欠	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
⑧Hueypuchtla	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
⑨Atotonilco G.	2	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		1	1	
⑩Xilotepec	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		1	1	
⑪Quahuacan	2	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		2	1	
⑫Toluca	3	—	—	2	1	—	—	2	1	2	1			B		2 (1)	1 (1)	
⑬Ocuilan	2	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	
⑭Malinalco	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1					欠	欠	
⑮Xocotitlan	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1	2	2	2	2*	欠	欠	
⑯Tlachco	1	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—	1	—	1	—	1	1	
⑰Tepequacuico	1	—	—	1	1	—	—	1	1	1	1			A		2	1	
⑱Chalco	2	2	2	—	—	2	1	6	2	2	2			C		1	1	
⑲Tepeacac	1	—	—	—	—	1	—	2	2	—	—	2	2	—	—	2	1	
⑳Coyolapan	1	—	—	—	1	1	—	2	1	1	—	2	1	1	—	1	1	
㉑Apan	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	4	2	
	24	2	2	18	16	4	2	28	21	21	18					26 (25)	19	
	26絵符		42 絵 符					88 トローヘ				88 トローヘ				60 ト		

M……トウモロコシ、

F……インゲン豆

CH……チア

H……ウァウトリ

A「4種の穀物で満たされた木製穀物容器4つ」

B「4種の穀物で満たされた木製穀物容器6つ」

C「4種の穀物で満たされた木製穀物容器8つ、及びトウモロコシ

* 2地区が合算されている。

**ファネガをトローヘに換算

***『情報』の2つの系列によって、数値が異なる

と、次のよう
な特長がみられ
る。
両者に共通す
る一八地区のう
ち一二地区にお
いて、MTとC
MⅡの穀物容器
数の比が、一對
二となっている。
他の六地区では、
穀物容器数が一
致している。前
者一二地区のう
ち九地区におい
ては、MTのC
型絵符が、トウ
モロコシ+細粒
と、インゲン豆

十細粒の二組に分けて描かれていることは重要である。一方、後者六地区のうち、アトニルコ・エル・グランデ、クアウアカン、オクイラン三地区で、MTのC型絵符二つが、CMⅡでは、トウモロコシ十細粒とインゲン豆十細粒の二組となっている。以上のことから、貢納表の原本から、MTを作成する過程と、CMⅡを編集する過程において異った方針がとられたということが窺えよう。すなわち、MTでC型の絵符で一つ示されたものが、CMⅡでは、トウモロコシ十細粒、インゲン豆十細粒という二組の絵符で示される傾向をもっている。

MTとCMⅡの穀物容器数が一致する六地区においては、CMⅡの編集時において、上記の方針が貫徹されなかったと考えたい。このことは、MTとCMⅡの穀物容器の絵符の種類も数もまったく同一な唯一の例、チャルコ地区の事例を検討することで、ある程度、うらずけうる。CMⅡの注釈では、C型の二つの絵符の容量は、それぞれ四トロヘ、トウモロコシのみの二つの絵符の容量は、それぞれ二トロヘとなっている。CMⅡで、穀物容器の容量が四トロヘとなっているのは、チャルコ地区のC型の二つの絵符だけである。一地区に、異なる容量の穀物容器が描かれたと考えることは不自然であり、CMⅡの絵符注釈の原則（二絵符＝二トロヘ）が適用できなかったこと自体、CMⅡにおける六地区の穀物容器絵符の書き方が、他の一二地区における方針と異っていたことを示唆するものと思える。CMⅡが同一方針で描かれたとするなら、これら六地区の穀物容器数は、MTの二倍となっているべきであろう。逆に、CMⅡの絵符数が正しく、MTは、その半分の絵符数でなければならないという仮定は、CMⅡで穀物容器数が奇数という地区が存在することで成立しにくいだろう。

以上の推論は、完全なものとはいえないが、本稿では、MTの穀物容器絵符にもとづいて、貢納量を算出する方法をとる。しかし、この場合、あらたに解決しなければならないいくつかの問題が生じる。

第一の問題は、MTにおける欠落地区の穀物容器絵符の数をどう扱うかである。CMⅡに、トウモロコシ十細粒とインゲン豆十細粒の二絵符で描かれているアシヨコパン、アトニルコ・デ・ペドラサの二地区は、C型の穀物容器一つがM

Ｔでは描かれていたと仮定したい。また『情報』にのみ言及のあるアパン地区は、『情報』における穀物貢納量記載とＣＭⅡのそれに一義的な対応関係が見出せない。そのためＭＴにおけるアパン地区の穀物容器絵符数を確定できないが、一応一つ、あるいは二つと考えることにしたい。^②

次に、ＭＴにおける一つの穀物容器の容量および、各穀物の構成比についても問題がある。ＭＴの注釈には、容量についての言及はみられない。ボラーとクックは、ＣＭⅡの一穀物容器容量が二トロヘ、ＭＴとＣＭⅡの絵符比が一对二となっていることから、ＭＴのそれは四トロヘであったとしている。そして、その穀物構成については、「四トロヘ、トウモロコシ、インゲン豆、チア、ウァウトリそれぞれ一トロヘずつ」というＣＭⅡの解説部の意見を採用している。しかし、前述したごとく、チア、ウァウトリはあくまで補助的穀物でしかなく、それらがトウモロコシ、インゲン豆と同量ずつ貢納されていたとは考えられない。むしろ、「四つの穀物で満たされた四トロヘ」という説の方が妥当と考える。もし、ＭＴの穀物容器容量を四トロヘとするなら、トウモロコシ＋細粒で二トロヘ、インゲン豆＋細粒で二トロヘと考えることもできよう。

この容量「四トロヘ」という推論とも結びついて、絵符に示された穀物量の貢納回数が問題となる。ＣＭⅡや『情報』によると、これらの穀物類は、年に一度貢納されたことになっている。一般に貢納回数は「貢納品の性質、そして各町から運搬に要する距離を」^③考慮して定められていたというが、穀物の収穫度数から考え、年に一度という説は妥当ともいえる。しかし、ベルダンが指摘した、貢納は一部例外地区（ソコノスコ地区）を除き、八〇日間隔で納められたという説も捨てがたい。^④すなわち、ＣＭⅡなどの注釈にある「四トロヘ」。これらは一年に貢納する」という部分の解釈として、次のような可能性を想定しうる。ＭＴの一つのＣ型絵符の容量は、あくまで絵符の示すままの一トロヘであり、八〇日毎の貢納とするなら、一年で四・五トロヘという勘定になる。太陽暦とは適合しにくい年四・五回の貢納が、実感としては年四回の貢納と意識されていた可能性も生じる。とすると、ＣＭⅡの「トウモロコシ、インゲン豆、チア、ウァウトリの

入った四トローへを一年に一度納入」という注は、前述の仮定のような実態を示しているとも考えうる。

以上の問題に対する筆者の態度は明確ではない。想定しうるいくつかの説のひとつのみを採用しうるだけの材料をもつてはいない。が、以後の議論を進めるため、とりあえず、年間穀物貢納量として第三表のごとく、A案（一トロー×四・五）とB案四トロー（の二つを提出した。この数値はいずれも、従来の研究者たちの算出した数値をかなり上回る。

(三) 穀物貢納地区の分布

穀物類を貢納した地区の分布は、第二図のようになる。オアハカ谷のコヨラパン地区は、メヒコから八二レグア（約四五〇km）も隔っている。この地区を除けば、すべての穀物貢納地区の主邑は、メヒコから一五〇km以内の圏内にある。そのほとんどが、中央高原とその縁辺部に位置し、熱帯低地地方からの穀物貢納はみられなかった。熱帯低地地方から穀物貢納がなかった理由は、それらの地方の穀物生産余剰が少なかったからではない。ワステカ地方やトナカ地方では、年二〜三回のトウモロコシ収穫がおこなわれていた^②。また、メヒコ盆地一帯が凶作・飢饉となった時、これらの地方から、大量のトウモロコシが搬入されたり、メヒコ盆地の住民が逆に移住植民したこともあった^③。これら、アステカ「帝国」内の豊かな穀倉地帯ともなりえた地方から、穀物類の貢納がなかったのはなぜか。

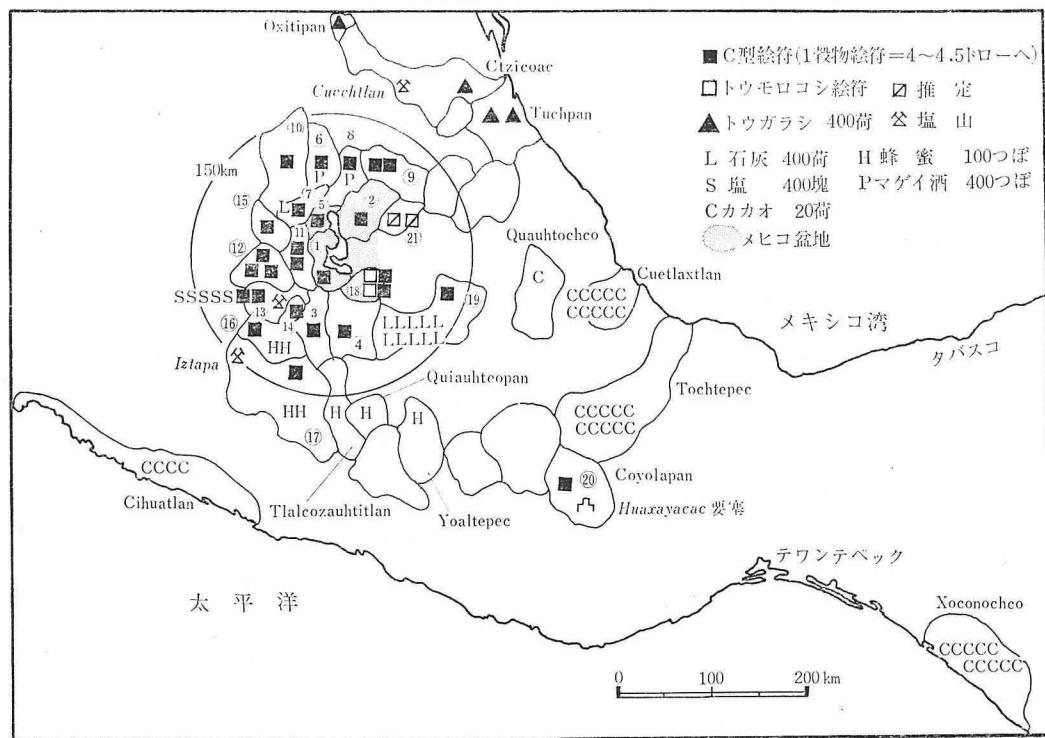
それは、前述したソリタの言が示すように、穀物という貢納品のもつ重荷性と、それを運搬する距離によって、ほぼ説明しうる。スペイン人との接触時における種々の物価については『情報』によって知ることができる。いま担荷夫一人分の量（一荷（約二三kg）あたりの価値を比較してみると次のようになる^④。

トウモロコシ・チア……〇・二五レアル

インゲン豆・ウアウトリ……〇・五レアル

木綿製無地マント（二〇枚）……一六〇レアル

第2図 食料資源の貢納（番号は第3表に対応）



カカオ(二四、〇〇〇粒)……一六、〇〇〇レアル

一般に、メソ・アメリカでの交易活動において重量を規準とした交換はみられなかった^②というものの、トウモロコシなどの穀物類の重荷性は、その輸送手段を考えると一層、意味をもってくる。内陸部における輸送手段は、湖床を擁するメヒコ盆地におけるカヌー輸送を除き、すべては担荷夫 *tlaneme* の背に委ねられていた。ラクビヘロによると、担荷夫一人の負担量(二荷)は、約二三kg、一日走行距離五レグア(約二八km)が基準であった^③。

さて、一荷分のトウモロコシ、〇・五ファネガは、およそ、成人一人の約四〇日分の消費量に相当する^④。「帝都」向けの貢納品の担荷夫の食料は通過、宿泊する町々から徴発されていたと思われる。その場合、当該地区の主邑からメヒコまでの行程で徴発される食料(トウモロコシに換算)の累積 $f(x)$ は、次式で示される。

$$f(x) = \frac{A}{20}x \quad A \dots \text{基本穀物貢納量、} x \dots \text{日数(片道)}$$

また、権力による食料徴発がみられない、市場システムにおける穀物輸送を想定した場合、当該地区が担荷夫のため準備せねばならない超過負担量 $g(x)$ は、次式で示しうる。

$$g(x) = \frac{Ax}{20-x}$$

穀物貢納地区のうち、他地区とは極だって遠距離にあったコヨラパン地区は、メヒコから約一六日行程である。その場合の徴発穀物量累積は、基本穀物貢納量の実に四分の三に達する。このような負担が生じる地区に穀物貢納がみられることは、どう説明しうるのか。バーローらは、オアハカ谷産のトウモロコシが柔かくて白い良質のものであったことを示唆している^⑤。しかし、筆者は、コヨラパン地区に計上された穀物類は、メヒコではなく、オアハカの軍隊駐屯地(要塞)に搬入されていたと推定したい。

従来、各要塞への食料、燃料、武具などの調達といった生産物形態による周辺の町々からの貢納は、貢納表には含まれていなかったとされている^⑥。しかし、オアハカ要塞は、サポテカ、ミステカ系の町々の軍事的制圧とともに、もうひとつ

重要な目的をもっていた。それは、テワンテペック地峡部を経て、グアテマラ方面に至る遠隔地交易路の中継基地という役割である。グアテマラに接するソコノスコ地方は、貢納地区のひとつであり、その主邑ソコノスコには要塞も設置されていた。しかし、このソコノスコ地区とコヨラン地区の間は、約一二〇レグア（約三週間）もある。アウィットル王、モテクスマ二世時代を通じて軍事的制圧を試みたものの、通過地の町々から円滑に食料を徴発する体制は確立していなかったと思われる。この間のキャラバンに必要な食料を両端の要塞で確保する必要があるが生じる。オアハカの要塞には、そのキャラバンを護衛する軍隊も駐留するなど、この要塞は、アステカの要塞のなかで最大規模のものであった。貢納表にみられるコヨラン地区の貢納穀物類は、こうした目的のためオアハカの要塞に搬入・貯蔵されたと考えたい。

さて、このコヨラン地区を除いた、他の穀物貢納地区に割り当られた穀物貢納量は、一律ではない。穀物容器一つ分で示される量を仮に標準量とするなら、トルカ地区はその三倍、チャルコ地区はその四倍の量を貢納していた。トルカ地区のトゥモロコシは硬質細粒で長期保存がきくことで知られ、チャルコ地区はチナンパ耕作地帯で生産力が非常に高かったことが知られていた。このような理由からだけで、地区毎の穀物貢納量の差異を十分説明することはできない。他のカテゴリーに属する貢納品を含めた全貢納量とその価値、ならびに輸送距離・輸送コストをも考慮した分析を必要とするので別に扱いたい。

さて、以上の議論から、「帝都」メヒコに搬入されていた貢納穀物量は、A案で一二六―一三〇・五トロヘ、B案で、一一二―一六トロヘという一応の結果が導びき出しうる。これらの貢納穀物量は、チャプルテペックに至る堤道上にあったペトラカルコ Petlacalco という食料品備蓄のための王室（帝都）管財庫に貯蔵されていたものと思われる。コディセ・フロレンティノにはその記述がある。

「ペトラカルコ、ここにはあらゆる食料品が貯蔵されていた。乾燥トゥモロコシは木製穀物容器に収納されていた。それは、二千〔ある単位〕以上の乾燥トゥモロコシで、市のための二〇年分の量であった。又、木製穀物容器には、乾

燥インゲン豆、チア、ウァウトリ、チアンツォツォル、そして塩、粗塩、トウガラシ、ペピータ、大粒のペピータなども収納されていた。(傍点筆者)^④

これはナワトル語文の拙訳であるが、サアグンの残した同所のスペイン語文は若干異なり、傍点部は次のようになっている。「市と共和国の糧食として、二〇年間も腐敗せずに、二千ファネガものトウモロコシを収納しうる木製穀物容器……」^⑤ナワトル語文とスペイン語文のどちらが正しいのか不明である。もし前者を採るなら次のような、貢納表との整合性を見い出せる。拙訳で「ある単位」とした部分が、木製穀物容器の分量(トローン)であるなら、二千トローンが二〇年分、すなわち、一年分は百トローンとなり、貢納表の検討から導びき出された数値と極めて近いものとなる。ただし、この場合、インゲン豆、チア、ウァウトリの量がナワトル語文において含まれていないという難点がある。

- ① Sahagún, Fr. Bernardino de, *Historia General de las Cosas de Nueva España*, México, 1975, pp. 463-465. Cortés, *op. cit.*, pp. 67-68. Díaz del Castillo, *op. cit.*, pp. 167-68. El conquistador anónimo, "Relación de algunas cosas de la Nueva España, y de la gran ciudad de Temestitan México" C. D. H. M., t. 1, p. 379.
- ② Sanders, William T., "Agricultural History of the Basin of Mexico" in Eric R. Wolf (ed.), *The Valley of Mexico, Studies in Pre-Hispanic Ecology and Society*, Santa Fe, 1976, pp. 101-159.
- ③ Scholes & Adams, *op. cit.*
- ④ Durán, *op. cit.*, pp. 206-209.
- ⑤ Miranda, E. G. de, y Gyves, Z. F. de (eds.) *Atlas: nuevo atlas porfiria de la república mexicana*, México, 1972, p. 135.
- ⑥ Cortés, *op. cit.*, p. 51. なぞ' ナモノ' 湖岸など見られるモノとごう接頭辞のつく町々の多くは塩業と関連をもつことと想われる。
- ⑦ Mendizábal, Miguel O. de, *Influencia de la sal en la distribución geográfica de los grupos indígenas de México*, Mexico, 1928, pp. 193-94.
- ⑧ Durán, *op. cit.*, p. 188. Bryan Davies, C. N. *Los señores Indpendientes del Imperio Azteca*, México, 1968, pp. 43-44. Barlow, Robert H., *The Extent of the Empire of the Culhua-Mexica*, Berkeley & Los Angeles, 1949, p. 19.
- ⑨ Mendizábal, *op. cit.*, pp. 191-97, 209-212.
- ⑩ 『情報』ビザ' ナンブカ地区の石灰荷は' ビノールと解説されている。ビノールは磨った穀物類の粉を携行食となる。
- ⑪ Benitez, Ana M. de, *Cocina Prehispanica*, México, 1974, p. 38.
- ⑫ Durand-Forest, J. de, "El cacao entre los aztecas", *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol. 7 (1967), pp. 155-181. ditto. "Cambios económicos y moneda entre los aztecas", *Estudios de Cultura Náhuatl*, vol. 9 (1971), pp. 105-124. 通貨としての利用については

- ① 初編の記載によれば Cortés, *op. cit.*, p. 57. Motolinia, Fr. Toribio de, *Memoriales*, México, 1971, pp. 372-74. Cervantes de Salazar, Francisco, *México en 1554 y titmulo imperial*, México, 1972, p. 55. Zuazo, Alonso, "Carta del Lic. Alonso Zuazo" *C. D. H. M.* t. 1, p. 361. El conquistador anónimo, *op. cit.*, p. 380. 449-450°
- ② Bergmann, John F., "The distribution of cacao cultivation in pre-columbian America", *A. A. A. G.*, vol. 59 (1969), pp. 85-96.
- ③ Beckmann, Johannes, "Schokolade u. Kakao in der spanischen Kolonialzeit: Missionarisch-Kulturelle Haltungen u. Problem", *Anthropos*, Bd. 63/64 (1968/69), SS. 524-48.
- ④ Andrés de Alobiz, Fr., "Estas son leyes que tenían los indios de Nueva España, Anáhuac o México", en Orozco y Berra, *Historia Antigua y de la Conquista de México*, México, 1960, t. 1, pp. 223-28. Sahagún, *op. cit.*, pp.
- ⑤ ホムカウ族の諸族が、トナントの神國のメスキート mequite の実を原料としていた。
- ⑥ チン・マヌエルは、宗教用の偶像を造るために使用された。
- ⑦ Sahagún, *op. cit.*, pp. 105-106, 150-52.
- ⑧ Clark, J. Cooper, (ed.), *Códex Mendoza*, London, 1938. Barlow, R. H., *op. cit.*, Molins Fabrega, N., *op. cit.*, Borah W. and S. F. Cook, *The Aboriginal Population of Central Mexico on the Eve of the Conquest*, Berkeley & Los Angeles, 1963.
- ⑨ Berdan, F. F., 1976, *op. cit.*
- ⑩ Kingsborough, *op. cit.*, folio 71°.
- ⑪ Borah 449-450° 1. 549-550° Borah & Cook, *op. cit.*, p.
- ⑫ Zorita, Alonso de, *Life and Labor in Ancient Mexico: the Brief and Summary Relation of the Lord of New Spain*, New Brunswick, 1971, p. 193.
- ⑬ Berdan, F. F., 1976, *op. cit.*
- ⑭ Moreno Toscano, Alejandra, *Geografía económica de México (siglo XVI)*, México, 1968, p. 62.
- ⑮ Durán, *op. cit.*, pp. 243-44.
- ⑯ Scholes y Adams, *op. cit.*
- ⑰ Durand-Forest, J. de, 1971, *op. cit.*
- ⑱ Clavijero, Francisco Javier, *Historia Antigua de México*, México, 1971, p. 23.
- ⑲ 成人一人の年間穀物消費量 (トウモロコシ) 換算) については諸説ある。本稿では二〇〇ポンド前後 (約四・三〜四・五トナネガ) を試算している。
- ⑳ Barlow, R. H & E. Anderson, "The maize tribute of Moctezuma's Empire", *Annals of the Missouri Botanical Garden*, vol. 30 (1943), pp. 413-21.
- ㉑ *ibid.*
- ㉒ Durán, *op. cit.*, pp. 383-39, 425-31.
- ㉓ テオチマクタン・チン・サウノ地区はこの体制が確立した地方として有名。
- ㉔ Florentine Codex, *op. cit.*, p. 44.
- ㉕ Sahagún, *op. cit.*, p. 467. この説は「情報」に「ペトラカルノの木製穀物容器の容量が六千五百〜四千五百トナネガとのべられていた」という矛盾がある。Scholes y Adams, *op. cit.*, pp. 29, 67.

四 メヒコの食料資源調達

貢納表に計上された食料資源、とりわけ穀物類の貢納が、「帝都」メヒコの人口扶養という面で、「帝都」の都市経済基盤として有していた意味・役割を解明するためには、次の三点を問題にしなければならない。第一に、「帝都」の人口規模、第二に貢納穀物類など食料資源の再分配システム、最後に、貢納システム以外の食料資源調達システムなどとの関係である。

(一) メヒコの人口規模

スペイン人到来時のメヒコの人口規模について、現在まで数多くの推定がなされた。その方法は、大別すれば次の三つである。

(イ)……征服者・年代記者の報告を利用。

(ロ)……集落形態からの推測。

(ハ)……食料貢納量からの推測。

メヒコの人口規模に関する初期の報告は、マルティル Pedro Mátyr、スアソン Alonso Zuazo、無名征服者によるものである。^①この三者は、単位こそ、家(casa)、市民(yecino)、住民(habitador)と異なるが、いずれも六万という数値を示している。この数値が、征服者の観察、被征服者側から得た情報の、いずれに基づいたか不明である。後の年代記者、トルケマダは一二万戸、クラビヘロは一三万戸ともしているが、両者を除けば、ほとんどの年代記は、六万戸、あるいは六万人という数値を示す。従来の研究の多くは、一戸平均四〜五人として、メヒコの人口規模を三十万人前後と算出している。^④この数値は、一六世紀初頭の西欧都市のそれを凌ぐものであった。^⑤そのため、単に六万人に過ぎないとか、六万とい

う数値自体、でたらめだという意見が、昔から出ていた。^⑥

こうした記録に依拠せず、他の手続で、人口規模を推定する試みが、今世紀初頭から試みられた。そのひとつが、メヒコの集落・耕地形態を手掛りに人口規模を算出する方法である。このための資料は、メヒコ市の一部を描いたといわれる有名な「マゲイ図」である。^⑦この絵図には、ある地区の家とそれに付属したチナンパ耕地からなる屋敷地が、四〇〇あまりある。マゲイ図にある区画をメヒコの都市域の一部に比定し、全都市域の人口を逆算するという方法は、比定地によって算出推定人口が大きく左右される。

トラテロルコ地区の北東部に比定したフェルナンデスは、人口規模を六万二千人とした。^⑧一方、メヒコ市北西部のクエポバン地区の一面に比定したモーズレイは、二万三千人弱としている。^⑨しかし、同じ比定をしたサンダースは、人口規模を七万二千～八万二千人としている。^⑩こうした差が生じるのは、メヒコ全都市域の面積、一屋敷地の面積および人口についての数値が異なっているのも一因である。^⑪しかし、それ以上の方法的誤ちが、これらの研究に内在している。

それは、メヒコを「チナンパ型都市」と考え、マゲイ図の居住地構造を全都市域に適用しようという前提である。この仮説を根底的に批判したのは、カルネックである。^⑫彼は、マゲイ図にみられる居住地構造は、都市域の外縁部に限定され、中央神殿区に近い地帯では、チナンパ耕作地が付属する屋敷地は存在しなかったと指摘している。また、チナンパ耕地の付属する屋敷地においても、そのチナンパ耕地面積は平均〇・〇五haにすぎず、そこからの農業生産物は、平均的な屋敷地居住集団の必要とする量の約十分の一ほどでしかなかったとしている。^⑬すなわち、従来、強調されたメヒコ市内のチナンパ耕作も、メヒコ市の人口扶養という面では、マージナルな意味しか有していなかったといえる。メヒコ市域におけるチナンパは、むしろ居住地拡大を目的とした土地造成技術として大きな意味をもっていたと考えるのが妥当であろう。

なお、カルネック自身は、その手続は明らかにしていないが、人口規模を一五～二十万と推定している。^⑭

さて、メヒコ市内のチナンパ耕作地が、人口扶養能力を欠くとすれば、市域外から搬入される食料資源の量から、あ

る程度、人口規模を算出することも可能である。この方法を採用したのは、クックとシンプソンである。彼らは、貢納表の貢納穀物量を、成人の年間穀物消費量で除し、三六万という数値を出している。^⑮ 彼らの計算では、穀物容器の量が実際より三倍近く過大な六〇〇トンとされていた。また、全穀物容器数(トローヘ数)も、クックが後に提起した数より少ない。クック自身は、この二つの誤りを後に訂正したが、^⑯ その数値で計算しなおすと、一五万という人口規模となる。この方法では、成人の年間穀物消費量の推定値によって、算出される人口規模が左右されるという不確定性がある。^⑰ しかし、この方法の最大の欠陥は、食料資源調達に諸システム、貢納穀物類の再分配システムをまったく無視していることである。現在のところ、メヒコの人口規模については、上記の方法による推定値しかない。筆者自身、どれを採用するかという判断は下しかねるが、一応、最小で十五万人、最大で三十万人という範囲に収まるものと考える。

(二) 食料資源の調達—再分配システム

貢納表に計上され、メヒコに搬入された穀物類の量は、一トローヘで約千人の人口を扶養しうるとして、おおよそ、十二万〜十四万人を扶養しうる量である。この膨大な量の貢納穀物類が、どのように再分配されたかを知り手掛りは少ない。ペトラカルコに貯蔵された食料が、水害、旱害による不作、飢饉時に放出されたという記録はみられるが、^⑱ 量的配分については言及がない。「帝都」の財政機構、とりわけ歳出に関する研究は、進展しておらず、貢納表に計上された諸種の貢納品は、「帝国」の統治・行政部門に充てられていたであろうと推定されている程度である。^⑲ F・カッツは、貢納の再分配先を分類して、十の配分先を掲げている。しかし、それらのうちのどの部門が、貢納表に示された貢納体制によって支えられていたかを明示してはいない。

確かに土地占取の諸様式を示す言葉を手掛りに、再分配システムと調達システムの関係がある程度推測することもできる。たとえば、カッツのあげている戦争経費はミルチマリ *milchimali*、カカロミリ *cacalomili* と呼ばれた土地から、

領主一族や王宮の維持費は、トラトカトラリ tlatoctalli やテクパントラリ teopantalli といった土地から捻出されていたであろうと考える。しかし、これらの土地は、カルブラリ calpullalli という村落共同体の土地とはまったく別種の土地占取様式に属するものと、従来から指摘されてきた。貢納表に計上された穀物類を含めた食料資源は、あくまでも被支配地域の各町々が有していたカルブラリで生産されたものの余剰に外ならないと筆者は考えている。このカルブラリとは異ったカテゴリーの土地の所有権は、村落共同体を越えた「国家的所有下の土地」ということで、トラトカヨトル tlatoctoyotl（領主であること）「国家」に属するものであるといえよう。^⑧これらの耕地は、一定の面積を有した耕地区画として、支配地域に散的に配分されていたと思われる。^⑨こうした耕地区画は、植民地時代初期に旧領主の子孫が提出した文書でしばしば、エスタンシアと呼ばれている。これらの土地から、領主あるいは貴族・神官などの支配階層の一部に納められる食料資源の調達回路を本稿では、エスタンシア・システムと呼ぶことにしたい。もちろん、このシステムは、「帝国」の諸貢納体制の一部を形成することはいうまでもない。それゆえ、本稿でのべてきた貢納システムというのは、貢納表に体现される食料資源調達のシステムの謂に外ならない。

これまでの議論によって、「帝都」メヒコの食料資源調達は、主として次の三種のシステムによって保証されていたと推測しうる。^⑩

- (イ)……市場システム、^{メルカド}(ロ)……貢納システム、^{メルカド}(ハ)……エスタンシア・システム。

しかし、この三種の食料調達システムの実態については十分なことはわかっていない。とりわけ、市場システムに乗った食料資源の余剰は、どのような占取形態にあった土地からもたらされたのであるかについては、現在のところまったく不明である。また、三種の食料調達システム相互の関連も十分解明されてはいない。各システムを回路として「帝都」に集荷された食料資源の再分配システムについても同様である。次節では、各システムが「帝都」メヒコの人口扶養という面において、どの程度の比率で貢献していたかについて、文化生態学派の一研究者が提出した仮説的モデルを検討しつつ、

論じていきたい。

(三) J・パーソンズのモデルの検討

本節で検討する仮説的モデルとは、J・パーソンズが、征服前のテノチティトラン（メヒコ）の食料資源調達におけるチナンパ耕作の役割に関して提出したものである^④。彼は、一九六〇年代から継続している「メキシコ谷調査計画」で得られた諸データに基づき、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のチナンパ耕作地域が持っていた食料資源の余剰生産能力を推定しようとした。彼が依拠したデータは、(イ)：湖域における征服前のチナンパ耕作地の面積、(ロ)：surface surveyによる湖域の集落と人口規模推定、(ハ)：チナンパ耕作の生産性に関する諸データ、(ニ)：メヒコの人口規模、搬入食料資源（貢納による）などに関するエスノヒストリカルなデータ^⑤、といったものであった。

第4表 J・パーソンズの仮説モデル

	エスタンシア*	プ エ ブ ロ**	全 域
総 人 口 (A)	4,220人	39,000人	43,220人
総人口扶養に要する耕地面積 (B) (A)×1/15 ha/人	280 ha	2,590 ha	2,870 ha
耕 作 者 数 (C)	1,500人	(11,200人)	12,700人
耕 作 地 面 積 (D) (C)×0.75 ha/人	1,125 ha	(8,375 ha)	9,500 ha
余剰生産面積 (E) (D)－(B)	845 ha	5,785 ha	6,630 ha
余 剰 生 産 量 (E)×3 t/ha	2,535 t	17,355 t	19,890 t
1) エスタンシア・システムによる 搬 入 量 同 扶 養 人 口	2,535 t 12,675人	—	2,535 t 12,675人
2) 貢納システムによる 搬 入 量 同 扶 養 人 口	—	800 t 4,000人	800 t 4,000人
3) 市場システムによる 搬 入 量 同 扶 養 人 口	—	16,555 t 82,775人	16,555 t 82,775人

* エスタンシアは、J・パーソンズでは landed estate

** プエブロは、J・パーソンズでは nuclear center

ゴチック数字は基本データ

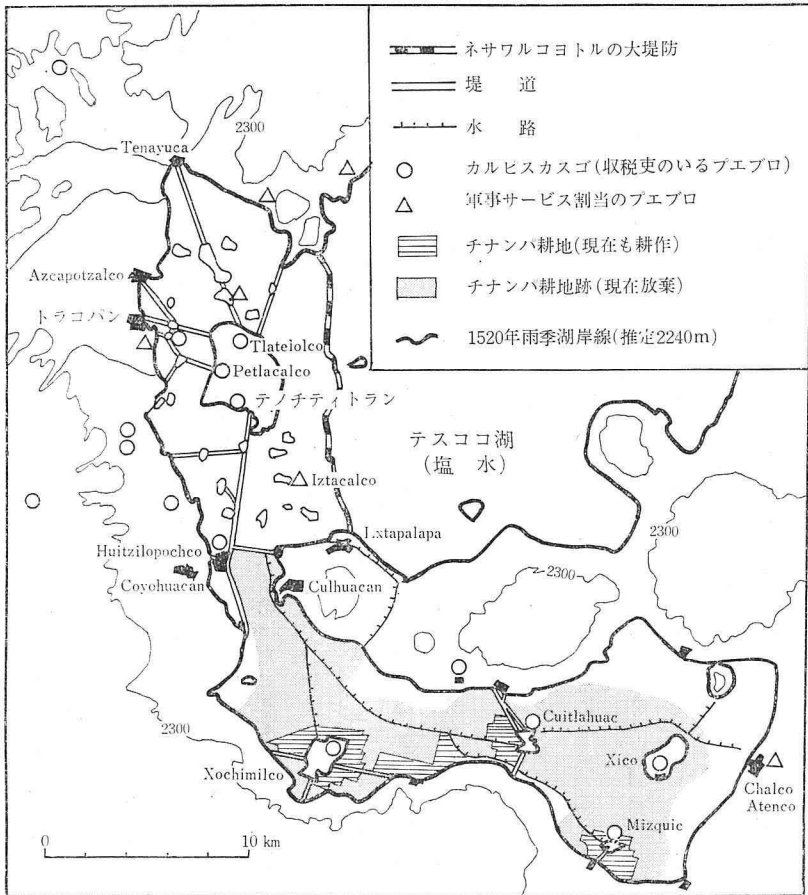
()内数字は、J・パーソンズの算出していないもの

第四表は、彼の仮説モデルにおける推論の過程を示したものである。彼は、彼のグループのおこなった、チャルコ・シヨチミルコ湖床域（約二〇〇km²）の surface survey にもとづき、同地域の集落および人口規模を推定した。彼が nuclear center と命名したクルワカン、トラワック、ミスキック、シヨチミルコ、シコ、チャルコは、湖岸および湖中の島に立地し、人口規模は、二千人〜一万五千人に達する集落である。この六つのセンターの人口総計は、三万九千人である。これらの集落とは別に、湖床全域に散在する、一〜五つのマウンドで構成される小規模集落が、一四八ヶ所あった。その九割強は、人口五〇人以下と推定されるもので、一四八ヶ所の人口総計は、四、二二〇人となる。彼は、この後者の集落を landed estate と見做し、その居住者は専農的な小作人であったと想定した。^② 彼らの耕作するチナンパから生産された余剰食料資源は、本稿でいうエスタンシア・システムをとおして、テノチティランに搬入されたとした。

以上の前提に基づき、彼は、チャルコ・シヨチミルコ湖床域から、エスタンシア・システムで「帝都」に搬入される食料資源の量をトウモロコシに換算して、二、五三五トンとした。その際、一耕作者の耕作可能面積を〇・七五ha、チナンパ耕地一ha当りのトウモロコシ収穫量三トンという係数を用いた。^③ この係数は、サンダースの現在のチナンパ耕作に関するデータに基づいたものである。

一方、湖床域のチナンパ耕作地総面積九、五〇〇haから、エスタンシアに属する耕地面積を除いた八、三七五haの耕地から生産しうる余剰食料資源の量は、一七、三三五トンという結果になる。この余剰食料資源は、エスタンシア・システムではなく、貢納および市場システムを回路としてメヒコに搬入された。J・パーソンズは、貢納表のペトラカルコ地区における穀物貢納量を、同湖床域からの貢納システムによる貢納量と想定した。その穀物貢納量八〇〇トンを差引いた一六、五五五トンを、市場システムを回路にしてメヒコに搬入された食料資源の最大値と、J・パーソンズは見なしている。彼の導き出したこの数値は、約八万人を扶養しうる量に相当する。すなわち、貢納システムによるメヒコへの搬入穀物類総量の約三分の二にあたる量の食料資源を、チャルコ・シヨチミルコ湖域のチナンパ耕作地域は市場システムによってメ

第3図 メヒコ谷部南部



ヒコにもたらししていたということになる。J・パーソンズは、カルネックの提唱したメヒコの人口規模、一五〇二〇万人の約四割〜五割に相当する部分を扶養しうる食料資源が、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のチナンバ耕作地域から、市場システムによってメヒコに搬入されたと想定した。^⑩この仮説は、従来の通説、メヒコの経済は貢納体制によって維持されていたという見方と大きく異なる。

以上のJ・パーソンズの仮説的モデルの展開を支えたいくつかの仮説が、大きな問題を内包していることは、彼自身も認めている。テノチティ

トランの人口、チナンパ耕作地の総面積、チナンパ耕作の生産性、チナンパ耕作地域の貢納穀物量などの諸評価値をそうしたものとして彼は列挙している。このうち、最後のものについては、筆者は、J・パーソンズの推定が誤っていると考えている。彼が、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のチナンパ耕作地域に該当すると想定したベトラカルコ地区に含まれる二三の町のうち一八の町の位置比定が可能であるが、そのうち、チャルコ・シヨチミルコ湖床域に比定できるものは六つしかない。他の町は、テスココ湖西岸や、内陸部に比定できる。それゆえ、チャルコ・シヨチミルコ湖床域の貢納穀物量は、一定程度割引いて考える必要がでてくる。^⑤しかし、これ自体では、パーソンズの仮説の結論部の妥当性を何ら弱めるものとはならない。

彼の仮説的モデルの結論部を大きく異なったものにしうる要因は、むしろ彼および彼のグループの主張する方法論の可否と、歴史資料解釈の妥当性に求めうるだろう。前者はいうまでもなく、*surface survey*をもとにした人口推定の方法をさす。それは、各時代の遺物片（主として土器片）の分布範囲と分布密度を二変数として、人口規模を算出する方法である。^⑥この人口推定の手順の可否はさておき、この手順で算出された人口推定値が、多くの場合、歴史資料から算出された推定値をかなり下まわっている。それは、上記の方法が都市的な居住構造を持っていた集落においては不十分であることと関係しているものと思われる。筆者は、J・パーソンズが *nuclear center* として掲げた六つの町の人口総計は、彼の推定値の約二倍はあったものと考えている。^⑦また上記の六つの町以外にも、やや人口規模のレベルは下がるが、人口千人前後の集村的集落が存在していた可能性が大である。それゆえ、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のチナンパ耕作地から生産しうる余剰食料資源量は、J・パーソンズの推定値の約六割程度ではなかったかと考えている。

この修正値を基準に考えても、同湖床域から市場システムによってメヒコに搬入されたと推定しうる食料資源は、八、七〇〇トンにも及ぶ。しかし、筆者は、J・パーソンズが考えたように、この量がすべて、市場システムを回路にしてメヒコに搬入されていたとすることは危険であると考ええる。すなわち、上記六つの都市に居住する領主への貢納、あるいは

彼らが抱えていたエスタンシアからの上納という部分を、一定程度、差引くべきと考える。

以上のような問題点は残るものの、彼の仮説的モデルの指摘した次の点は、以後の研究においても重視すべきものとなる。すなわち、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のチナンパ耕作地域は、メヒコへの食料資源調達のために大きな意味をもっていた。しかも、そのかなりの部分が、市場システムと結びつた食料資源生産地として存在していたと推測しうる。一方、チャルコ・シヨチミルコ湖床域よりやや面積は狭いが、テスココ湖西部で、大堤防で囲まれた淡水域にもチナンパ耕作地が存在していた。^⑤このチナンパ耕作地からも、エスタンシア・システム及び、市場システムによって食料資源が、メヒコに搬入されていたと推測しうる。しかし、この地域は、現在、完全にメキシコ・シティの都市域に覆れ、チャルコ・シヨチミルコ湖床域のような復元は不可能である。

いずれにせよ、市場システムによる食料資源の集荷範囲は、その重荷性と担荷夫による輸送体系に制約されざるをえなかった。カヌー輸送が可能であったメヒコ盆地という有利性は存在したものの、それを圍繞する三千～五千m強に及ぶ山地の障害は絶対的なものであったろう。それゆえ、市場システムによる食料資源集荷範囲は、メヒコ盆地を越えることはなかったといえよう。その量については、明らかにできないが、貢納システムによる集荷総量に比して、それほど劣るものだったとは考えられない。

- ① Peter Martyr von Anghiera, *Adit Dehaden über Die Neue Welt*, Darmstadt, 1972, Bd. 2, p. 45. Zuazo, *op. cit.*, p. 366. El conquistador anónimo, *op. cit.*, p. 391. テルテールの数値はロレンソスら征服者の報告によるものと推定。^⑥
- ② Torquemada, Fr. Juan de, *Monarquía Indiana*, México, 1969, vol. 1, p. 291. Clavijero, *op. cit.*, p. 564. タチヤクロの数値は「カヌー五世文書館にあった文書を基にしたロレンソ・スニョ・Lorenzo Snioの著作（一六世紀半ば）を引用したもの」。
- ③ これらの年代記の一覧は「Clavijero, *op. cit.*, pp. 561-570. 参照。^⑦ 一言あたりの平均人数について統一した見解はなさ。これらの点を簡単に要約したものは「Sanders, W. T., "The Population of the Central Mexican Symbiotic Region, the Basin of Mexico, and the Teotihuacan Valley in the Sixteenth Century", in Denevan, W. M. (ed.), *The Native Population of the Americas in 1492*, Univ. Wisconsin Pr., 1976, pp. 85-150. がある」。
- ④ 一六世紀末でも「ロンドン一二十五万、ナポリ一二十四万、ミラノ一

○万、パリー一八万程度であつた。

- カ、ハリー—入万程度であった。
- ⑨ Clavijero, *op. cit.*, p. 566. Keen, Benjamin, *The Aztec Image in Western Thought*, New Brunswick, 1971, p. 152.
- ⑩ カネニヤはメコロ都市域外の可能性大と云ふ。⑧ Calnek, Edward E., "The localization of the sixteenth century map called the Magney Plan", *American Antiquity*, vol. 38 (1973), pp. 190-195.
- ⑪ Toussaint, M. E., Gómez de Orozco y Justino Fernández, *El plano de la ciudad de México: siglo xvi y xvi*, México, 1938, p. 72.
- ⑫ Maudslay, Alfred F., "The True History of the Conquest of New Spain", *Anales del Museo Nacional de México*, serie 3, vol. 1 (1909), pp. 51-54.
- ⑬ Sanders, W. T., "The population of the Teotihuacan Valley, the basin of Mexico, and the central Mexican symbiotic region in the 16th century", *The Teotihuacan Valley Project, Final Report*, vol. 1, p. 448.
- ⑭ 征服者の記録した数値から算出された、ヤ・五區の総人口は面積がおよそ近年の研究より指摘されたより。Lombarado de Ruiz, *op. cit.*, pp. 119-125. González Aparicio, Luis, *Plano reconstructivo de la región de Teotihuacan*, México, 1973.
- ⑮ Calnek, E. E., "Settlement Pattern and Chinampa Agriculture at Tenochtitlan", *American Antiquity*, vol. 37 (1972), pp. 104-115. ditto, "Conjunto urbano y modelo residencial en Tenochtitlan", Borah y otros, *Ensayos sobre desarrollo urbano de México*, México, 1974, pp. 11-65.
- ⑯ Calnek, *ibid.*, pp. 47-50.
- ⑰ *ibid.*, p. 54.
- ⑱ Cook, S. F., and Lesby B. Simpson, *The Population of Central Mexico in the Sixteenth Century*, Berkeley & Los Angeles, 1948, pp. 26-27.
- ⑲ Borah and Cook, *op. cit.*, pp. 58-59, 156.
- ⑳ ミニマム、わがわがの試算値からならびて一四六五（表三・二ノ下）を年間穀物消費量と云ふ。
- ㉑ Durán, *op. cit.*, pp. 242-43. Sanagín, *op. cit.*, pp.
- ㉒ López Austin, A., *La Constitución Real de México-Tenochtitlan*, México, 1961, pp. 124-126. Litvak King, J., *Cinatlán y Tepcoatlán, provincias tributarias de México en el siglo XVI*, México, 1971, pp. 28-32. Katz, Friedrich, *Situación Social y Económica de los Aztecas durante los Siglos XV y XVI*, México, 1966, pp.
- ㉓ Barta, *op. cit.*, pp. 144-148. Castillo Farreras, V. M., *Estructura económica de la sociedad mexicana*, México, 1972, pp. 74-84. López Austin, A., "Organización política en el altiplano central de México durante el posclásico", *Historia Mexicana*, vol. 23 (1974), pp. 515-550.
- ㉔ Barta, *op. cit.*, pp. 148-154. Castillo Farreras, *op. cit.*, pp. 79-84. López Austin, 1974, *op. cit.*
- ㉕ フンチャール（在位一四六九—一八一年）は、二二六の町に、それより二一〇・五×四〇〇・五ノラサ平方（表二・三）の耕地区域を持つていたと云う。ただし、面積は、三〇×六〇〇ノラサ平方（約五^四）の誤りと誤る。Pablo Nazareo de Xalocan, "Carta al rey Don Felipe II", Paso y Troncoso (ed.), *Epistolario de Nueva España*, t. 10, México, 19 pp. 109-129. 町長カネニヤの國境を
- ②六十と云ふ。

②③ Calnel, Edward E., "Organización de los sistemas de abastecimiento urbano de alimentos: el caso de Tenochtitlán", en J. F. Hardoy y R. P. Schaedel (ed.), *Las ciudades de América Latina y sus áreas de influencia a través de la historia*, Buenos Aires, 1975, pp. 41-60.

②④ Parsons, Jeffrey R., "The Role of Chinampa Agriculture in the Food Supply of Aztec Tenochtitlán", in Charles E. Cleland (ed.) *Culture Change and Continuity, Essay in honor of James B. Griffin*, New York, 1976, pp. 233-57.

②⑤ ノンビリヤスの航空写真による復原図を参照。Armillas, P., "Gardens on Swamps", *Science*, 174, (1971) pp. 653-61.

②⑥ イスタパラン半島側に関する R. Blanton, チャペルノ側に関する J. R. パーソンス自身の調査データを利用。J. R. Parsons, *op. cit.*

②⑦ 労働投入に関しては W・サンダーズの研究を唯一のものとして利用している。

五 おわりに

ギブソン Charles Gibson の指摘するように^①、貢納表はアステカ社会に関する諸種の考察の材料として貴重なものである。本稿では、食料資源の貢納を手掛かりに、アステカ帝国の本拠地メヒコにおける食料資源調達について考察を推めてきた。その過程において、アステカ社会の復原、再構成にとって避けて通ることのできない種々の問題が続出してき。とりわけ、集荷された食料資源の再分配システムならびにそれと関連した「帝都」居住者の階層的構成の問題、各食料調達システムと土地占取様式との関係などは未だ考察の眼が十分には向けられていないものである。また、本稿では、やや安易に借用した貢納・市場・エスタンシアの三システム間の関係も、各システムの実態把握を通じて、再検討する必要がある。

用いている。

②② 人口規模については Calnel, 1974, *op. cit.* 搬入量に関しては Molins, *op. cit.*, Barlow, *op. cit.* を利用している。

②③ Parsons, J. R., *op. cit.*

②④ チナンペル耕作地一帯のメウキロン生産量は二・四〜四トンと幅がある。

②⑤ Parsons, J. R., *op. cit.*

②⑥ 貢納表のチャペルノ地区の穀物貢納量の一部がこの湖床域から生産された可能性もある。

②⑦ Wolf, Eric R., *op. cit.*, pp. 71-74.

②⑧ たとえば、チャペルノ・シヨチミルノの両町は三万人以上を擁していた可能性もある。Torquemada, *op. cit.*, p. 287.

②⑨ いわゆるメヒコ湾で約一五〇km²の拡がりをもっていた。

以上の制約はあるが、環境論的な生産余剰を中心概念として都市起源・発達に関する説明モデルを提出した文化生態学派にとって、アステカの「帝都」メヒコは不都合な材料を提出するものといえよう。一四世紀に建設されて以来、メヒコの居住者が農業的労働に従事したという記録は顕著な形ではみられない。少なくとも都市建設者の集団は、湖中という戦略上、交易活動上の有利性に依拠して、貢納品受納、交易による生活物資の獲得という方法で、都市の経済的生存基盤を保証しようとしたといえる。

アステカ期において、メヒコ盆地では、「地方的共生ネットワーク」の結節点として機能していた地方（小都市的）中心地網が成育してきたといわれる。^③そして、メヒコ盆地の居住者の大部分は、何らかの形でこれらのネットワークと関与していたとさへ指摘されている。この中心地網、換言するなら市場網で覆れたメヒコ盆地地域を越えた地域から、軍事的征服を媒介とした貢納によって穀物が徴発されたのは、恐らく下記の理由からであろう。非農業生産者人口の集中する核として肥大していったメヒコの人口は、メヒコ盆地地域から市場システムによって調達しうる食料資源で扶養しうる人口量を上まわる危険があった。この危険性を回避する方策としてモレロス谷、トルカ谷、イダルゴ州南部などの諸貢納地区から食料資源が貢納システムによって、メヒコに搬入されていたと考えたい。逆にいえば、貢納システムによる食料資源調達によって、メヒコ盆地の地域中心都市という一定のレベルを越えた「帝都」としてメヒコは発達しえたといえよう。そして、「帝都」に居住する支配者層（領主、神官・官僚・戦士・貴族）の大部分、および工芸職人などの支配階層と密接に結びついた集団などが、貢納によってその生活を保証されていたと思われる。それゆえ、パーソンのモデルから導きだされた食料調達における市場システムの寄与率の大きさにもかかわらず、「帝都」としての経済は、貢納に大きく依存していたといえることができる。

① Gibson, Charles, "Structure of the Aztec Empire", *H. M. A.*
I, vol. 10 (1970), pp. 376-94.

② アステカにおける市場に関しては、征服者等の観察記録は存在するが、その内部構造、取引の諸様式、商品の流通過程、市場圏などの実

態についての研究は進んでいゝ。マナチカ Pochteca とする特權的
 遠隔地交易集團の研究に従来の研究は偏つてゐる。Acosta Sai-
 gnes, M., "Los Pochteca", *Acta Antropológica*, vol. 1, No. 1
 (1945). Chapman, A. M., "Port of trade enclaves in Aztec and
 Maya Civilizations" in K. Polany; et al. *Trade and market in*

the early empires. Glencoe, 1957, pp. 114-53.

⑨ Blanton, R. E., "The Role of Symbiosis in Adaptation and
 Sociocultural Change in the Valley of Mexico" in Eric Wolf,
 (ed.), *op. cit.*, pp. 181-201.

(民族学雑誌掲載)

Таким образом, осенью 21-го года, когда неудача идеи натуналага весны уже оказалась очевидной, рамки нэпа установились на основе товарно-денежных отношений и рыночного хозяйства. На основе изучения ряда происшествий с конца 20-го года до конца следующего автор попытается изложить процесс установления нэпа.

El abastecimiento de alimentos en México-Tenochtitlan : un análisis de Matrícula de Tributos

Por

Munehiro Kobayashi

Los sistemas de cambio económico de los bienes de subsistencia se han ignorado en el modelo de los ecólogos culturales, los cuales han considerado el desarrollo urbano en Mesoamérica como una consecuencia de las potencias ecológicas o de los progresos anteriores de productividad agrícola. Para poner la incorrección en clara a la luz de las pruebas etnohistóricas, se trata el caso de metrópoli del imperio azteca, México-Tenochtitlan.

Se dice que en el imperio azteca hubiera tres sistemas de cambio económico. Estos son, el sistema de tributo, de cambio en mercados regionales y de comercio exterior por los Pochtecas, éste no hubiera vinculado a los bienes de subsistencia. Por dos sistemas primeros, los alimentos que hubieran desempeñado un papel indispensable de sostener la gran cantidad de población no campesina hubieron llevado al metrópoli.

Según el análisis de Matrícula de Tributos que es un documento primario acerca de algún sector del sistema tributario, la cantidad de los cereales (maíz, frijol y otros) llevados desde las regiones simbióticas que colocan en un radio de 150 KM pudiera alimentar desde 120 mil hasta 150 mil personas. Por otra parte, tenemos menos evidencia de la contribución de alimentos llevados por el sistema de mercados regionales dentro de valle de México. Tampoco, tenemos la estimación decidida de la población del metrópoli. Por eso no podemos aclarar la contribución relativa entre los sistemas en cuanto a la economía de subsistencia del metrópoli. Sin embargo, tenemos que cosiderar el papel importante de sistema de mercados regionales no menos que de tributo.